

# 東京バッハ合唱団 月報

【第 650 号】 2016 年 8 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 650

August 2016

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 旧著『バッハの音楽的宇宙』の文脈のなかで 《ロ短調ミサ曲》「再訂版」の再演

大村 恵美子 (主宰者)

6月号に、「急告！」として、2011年(第106定演)に日本語演奏(初演)した《ロ短調ミサ曲》を、はやくも6年後の2017年に、創立55周年記念として再演することになった経緯をお知らせしました。これからの1年間は、前回と同様の、この作品へのアプローチを、新しい団員・聴衆方に呼びかけ、前回すでに立ち会われた方々にも、またこれまでの体験をまざまざと思い起こしていただくこととなります。

それにしても残念なのは、私が出版社の依頼で著述した『バッハの音楽的宇宙』が、知らないうちに出版社の都合で絶版とされていたことで、私の知る限り、今でも愛読して折りあるごとに読み返している、という多くの感想が聞かれています。私も、71曲の声楽作品によせて、バッハの音楽を紹介したこの本(丸善ライブラリー、1994年刊)から、引用して解説することがしばしばあります。《ロ短調ミサ曲》は、バッハの最後の作品ですから、この著書でも最後にしめくりとして書きました。

ご承知のように、2010年、私たちが4大作品連続演奏の第1弾として、この作品を準備している最中に、この作品が新バッハ全集「再訂版」の第1巻として公刊され、急遽、新しいヴォーカルスコアを私たちも買い直したものでした。

私はこの機会に、今は絶版となっている『バッハの音楽的宇宙』の最終頁にあたる《ロ短調ミサ曲》の解説部分を、2010年再訂版の楽曲構成(曲番号)を注解に加えながら、以下にご紹介させていただきます。構成表は、文末(p.3)に掲げました。

『バッハの音楽的宇宙』全体の内容は、次のような構造で書かれています。各主題のもとに、カンタータを中心としたバッハ作品をとりあげ、それぞれに、数行から数ページの解説(内容の把握)をほどこしたものです。刊行後20年余の間に、訳詞の改訂にともなって曲名表記が変わったものも少なくありません。以下に掲げた題名は、全合唱作品の訳詞が完了した今の段階での、確定した表記に統一しました。

4つの挿画は、旧著の各章扉に掲げられたもの。ただし、「2. 生活」の絵[次ページに掲載]のみは、モノク

ロームだったものを、別の図版(Jost Müller-Bohn, 1985)から採ったカラーのものとし差し替えました(スクリーン上のホームページをご覧ください)。上掲書では、「朝の礼拝中のヨハン・ゼバスティアン・バッハと彼の家族。E・T・ローゼンタールの描画による、1870」と題されています。『アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳・1725年』への書き込みが始まったころのバッハ家の生活が彷彿とされます。来たる12月の第114回定期演奏会(12月3日、府中の森芸術劇場)の案内チラシの挿画としても利用する予定です。

### 1. 歴史

#### 世界・自然(①-⑨)

BWV 106《神の時はいつも正し》、BWV 182《あまつ君を喜び迎えん》、BWV 46《見よやかかる痛みの世にあるべき》、BWV 26《はかなくむなしき地なるいのち》、BWV 18



《み空より雨雪降り》、BWV 31《天は笑い地はどよめく》、BWV 76《主の栄光を天は語り》、BWV 1《あしたに輝くたえなる星よ》、BWV 6《留まれわれらと夕闇せまり》

#### 社会・経済・貧困・階層(⑩-⑮)

BWV 186《怒るな心よ》、BWV 163《おのが務め果たせ》、BWV 75《貧しき者は食し》、BWV 10《わが魂主をあがめ》、BWV 243《マニフィカト(わが魂主をあがめ)》、BWV 39《与えよパンを飢えたる者に》

#### 挫折と勇氣(⑯-㉓)

BWV 131《深みより主よわれはなれを呼ぶ》、BWV 12《泣き嘆き憂い迷い》、BWV 21《われは憂いに沈みぬ》、BWV 199《わが心は乱れ騒ぐ》、BWV 38《深みより主を呼ぶ》、BWV 56《十字架を勇みて負わん》、BWV 228《恐るなわれなれと共にあり》(モテット4)、BWV 226《み霊わが弱きを助く》(モテット2)

### 2. 生活

#### 安定-保守(㉔-㉘)

BWV 84《われ足れりわが幸に》、BWV 82《われ足れり》、BWV 85《われは善き牧人》、BWV 151《いとしきわがイエス来ませり》、BWV 42《同じ安息日の夕べ》

#### 動-変化-革新(㉙-㉝)



BWV 70《起きて 祈れ》、BWV 90《恐ろしき終り なれら襲う》、BWV 140《目覚めよと呼ばわる ものみの声高し》、BWV 132《道を備え 直くせよ》、BWV 36《喜びのぼれいと高き星に》、BWV 110《喜び 笑い あふれ》、BWV 172《歌よ 琴よ とどろき渡れ》

### 3. 国家・政治



#### 王権と民権・戦争と平和 (36 - 45)

BWV 71《主は わが君》、BWV 208《楽しき狩こそわが悦び》、BWV 215《ほめ歌え 幸なるザクセン》、BWV 80《堅き砦ぞ わが主は》、BWV 79《神は わが光 わが盾》、BWV 67《留めよ 心にイエスを》、BWV 116《平和の君 イエス》、

BWV 19《戦い かくて起これり》、BWV 158《安らかにあれ おののく心》、BWV 104《牧人 主よ 聞けよ》

#### 都市と農村・家庭 (46 - 51)

BWV 211《コーヒー・カンタータ》、BWV 212《農民カンタータ》、BWV 150《なれを 主よ われは仰ぐ》、BWV 196《主は 覚えたもう われらを》、BWV 187《待ちのぞむ みな なれを》、BWV 190《主にむかいて歌え 新たなる歌を》

### 4. 宗教



#### 道徳 (52 - 59)

BWV 45《主は告げぬ よき行いの何なるかを》、BWV 24《直く清らに 澄みたる心は》、BWV 147《心と 日々のわざもて》

#### 心と身体 (60 - 68)

BWV 23《主なる神 ダビデの子》、BWV 78《イエス わが心を》、BWV 8《み神

よ わが死はいつ》、BWV 156《墓に 片足入れ》

#### 生と死 (69 - 72)

BWV 4《キリスト 死に繋がれしが》、BWV 229《おお イエス 来ませ》(モテット5)、BWV 245《ヨハネ受難曲》、BWV 244《マタイ受難曲》

#### 人間と神 (73 - 77)

BWV 68《み神はこの世を かく愛したまえり》、BWV 227《イエス 喜び》(モテット3)、BWV 100《神の御業こそ ことごと善けれ》、BWV 29《み神に 謝しまつらん》、BWV 248《クリスマス・オラトリオ》

#### 個と普遍 (78 - 79)

BWV 65《もろびと シバより来たりて》、BWV 51《全地よ 歡呼せよ み神に》、BWV 225《主にむかいて歌え 新たの歌》(モテット1)、BWV 232《ロ短調ミサ曲》

以上のような、壮大なバッハの「音楽宇宙」のなかでの、その隅の頭石(すみのかしらいし)の位置に、《ロ短調ミサ曲》は置かれました。その部分のみを引用してみます。

【p. 124 - 126】

#### 「個と普遍

これまでに、様々な主題をあげて、場合によっては同じ主題を補足しながら、バッハの宇宙を辿って来た。それは、その宇宙を、ぐるぐると螺旋状にめぐることによって、より高く、より深い理解へと入って行くことが出来るのではないかと考えたからであった。

今ここに残されているのは、「個と普遍」の考察である。偉大な個は普遍を表す、という真理は、いつどのような場合にも正しく、一言で言えば、バッハの宇宙もその一事に尽きると思われる。

ユダヤの片田舎につつましく暮していた少女が、あるとき神の選びにあずかったことを知って「今からのちの代々の人びとは、わたしをさいわいな女と言うでしょう」(マリアの讃歌)とうたい、その女を母とし、貧しい大工の家に生まれ育ったイエスが、召命を受けて世に出ると、盤石の重みをもったイスラエルの伝統と、厳しい統制をもってイスラエルに臨んでいたローマの国家権力を向うに廻して、大胆な言動で全世界にメッセージを送った。

同じように、バッハも、たゆまざる勉学、広く周囲に向けた情報蒐集、そして何よりも生得的に与えられた直観とで、地域と時代の枠をはるかに越えた時限まで見通し、二百年、三百年では掘りつくせないほどの泉のような作品群を残していった。現実生きていたバッハは、外国人のことを、外国のことを、また人間の生を、人間の死を、どのように感じ、理解していたのだろうか。それは、ちょうどイエスが、自国と他国との歴史的葛藤のもとに生き、他国人との差別を認めながらも折あるごとにその枠を越えてしまったように、バッハも、当時のドイツの一地域に生活する人間として、様々な制限をそのまま受け入れながら生きていたはずである。しかし彼は、多くの作品で聖書をテキストに用いることによって、小さな自分の生活圏から越え出て、広い大地と無限の大気を呼吸することができた。

聖書は、旧約の昔から、イスラエル民族が自分たちだけの神として仰いできた神に、裏切られ、余儀なく自分たちの態度を世界に向かっておし拡げさせられてゆくことを物語った記録である。ユダヤ人は神に選ばれたユダヤ人の共同体において神を民族の神として仰いでいたかった。また初代のイエスの弟子たちも、イ

エスを知る者らの共同体であるはずだったのに、いきなり異質なパウロが現れて、海を越えた地域にまで宣教して廻った。その結果、世界中の地域ごとに、ローカル色に塗りこめられた、多数の「正統的な」キリスト教が出来て、今日に至っている。しかし源は一つなのである。

あたかも「バベルの塔」の寓話が示すように、人間の側から神に近づこうとする、動機はまったく一つであった試みも、必ず中途から言語と行動の混乱が生じて、巨大な墓として立ちぐされてしまう。神からのシグナルを、個人において受けとめることしか、神との接近の道はないようである。

バッハの音楽が私たちに訴えるのは、バッハ自身が神の似姿を鑄造された硬貨となって、私たちの生活圏に有効なものとして出廻ることが出来るようになったおかげであろう。」

【p. 130 - 131】

[以下に挿入された括弧内の番号は、右掲の表を参照。小著執筆時(1994年)、《ロ短調ミサ曲》の訳詞上演は想定されていなかったもので、各楽曲の歌い出し(=表題)はラテン語カタカナ表記のままでした。訳詞初演は2011年]

①《ロ短調ミサ曲》

1724 - 49年(39 - 64歳)作。ついに私達は、バッハの最晩年、最後の作品にまで来てしまった。しかもこの作品は、バッハが25年の歳月をかけて書きこんで来たものである。

ここには、バッハの信仰のすべてがある。神の前にひれ伏して憐れみを祈る「キリエ」(1)。神の栄光を歌う輝かしい「グローリア」(4a)、地に平和を祈る曲折の多い連綿たる「エト・イン・テッラ・パクス」(4b)。神を讃える端然としたアリア「ラウドムス・テ」(5)、厳粛な感謝の合唱「グラツィアス」(6)。神と、神のひとり子の至高、至聖に思いをいたす「ドミネ・デウス」(7)以降。

キリスト教徒が千数百年にもわたって確かめ合い唱えついで来た「ニケア信条」の、全能の父の力強い「パートレム・オムニポテンテム」(11)、神のひとり子イエスの意義深い存在を歌う「エト・イン・ウヌム・ドミヌム・イエズム・クリストゥム」(12)。そのひとり子が肉体をとってこの人間の世に生まれる不思議に深められた「エト・インカルナトウス・エスト」(13)。十字架につけられる悲痛の「クルチフィクス」(14)。そして3日目によみがえったことが爆発的エネルギーで明るく告げられる「エト・レスレクシト」(15)。教会を成立させる神と人間、人間と人間の結びの糸となって絶えず働く聖霊を信ずる「エト・イン・スピリトゥム・サンクトゥム」(16)。教会の重要なわざであり、罪の赦しを得させる洗礼「コンフィテオル」(17a)。死からの復活と、永遠の命を待ち望む「エト・エクスペクト」(17b)。

ここの「ニケア信条」による信仰告白は、実に目のさめるように生き生きとした、お題目の唱和とは似ても似つかぬ心の表出で、イエスの生涯に関する部分ではリアリスティックな描写でもあり、キリスト教信仰というものが、行いすまし、悟りすました静的状態ではなく、この世に向かつての積極的行為に直結するものであることを、証している。

天国の力強さと高く広い宇宙をも越える悠久を讃えた「サンクトゥス」(18a)。人間のざわめきと従順とを両義的に伝える「ホサナ」(19)(エルサレムに入城したイエスを「ホサナ」と歓迎した群衆が、その直後に同じイエスを捕えて十字架の上に処刑した)。イエスの無垢に対する神の祝福「ベネディクトゥス」(20)。最後にあたり、もう一度心をこめて見上げる神の小羊「アニユス・デイ」(22)。人類と神の和解を最終的祈りとする、バッハの生涯の結論でもある「ドナ・ノービス・パーチェム」(23)。

このようにして、バッハは多産なその創作をしめくくったのである。(完)

2010年再訂版 [NBA<sup>REV</sup> 1(2010)] による楽曲構成

I 「ミサ」

訳詞：大村恵美子 (2011)

1	Kyrie eleison 主 憐れみたまえ われらを
2	Christe eleison キリスト 憐れみたまえ われらを
3	Kyrie eleison 主 憐れみたまえ われらを
4a	Gloria in excelsis Deo グローリア 高き天なる神に
4b	Et in terra pax 地に平和 主の民にあれや
5	Laudamus te 主を頌め 主を讃え
6	Gratias み神に謝しまつらん
7a	Domine Deus いと高き天の君
7b	Qui tollis 世の罪 除くもの
8	Qui sedes 父の右に坐する者よ
9a	Quoniam ただなれのみ 聖
9b	Cum sancto Spiritu み霊とともに

II 「ニケア信条」 SYMBOLUM NICENUM

10	Credo われ信ず 一つなる神を
11	Patrem omnipotentem 全能なるみ父
12	Et in unum Dominum Jesum Christum み神の ひとり子なる イエス・キリスト
13	Et incarnatus est 肉をとりて 人となりぬ
14	Crucifixus 十字架に 葬られぬ
15	Et resurrexit 主は甦(よみがえ)りたもう
16	Et in Spiritum sanctum 聖なるみ霊
17a	Confiteor 信じ 受く 主の洗礼を
17b	Et expecto 待ち望む 死せるものの 甦りを
-	Et expecto 待ち望む 死せるものの 甦りを

III 「サンクトゥス」

18a	Sanctus 聖なるかな
18b	Pleni sunt 天地は みな み栄に満つ

IV 「ホサンナ」 他

19	Osanna in excelsis ホサンナ 高きに
20	Benedictus 幸なり み名により 来るものよ
21	Osanna in excelsis ホサンナ 高きに
22	Agnus Dei 小羊 世の罪 除くもの
23	Dona nobis pacem 平和を われらに



## [日本語版]バッハ・カンタータ 楽譜全集 最新刊のご案内

合唱団の演奏計画に連動して、カンタータの楽譜を出版していこうという構想のもと、今回も2冊の新刊楽譜を上梓しました(7月20日発行)。年末開催の第114回定期の演目です。いずれも、バッハの教会カンタータ作品のなかで、特異な位置づけをもつ重要な曲なので、とくに公演の広告もかねて、紹介します。

### ■カンタータ第14番《かたえに 主 いませずば》

Wår Gott nicht mit uns diese Zeit BWV 14

ISBN978-4-925234-74-0 C3373 本体 1900 円

当合唱団が公演でこの曲を取りあげるのは初めてです。正規の編成による日本語演奏は本邦初演といえるでしょう。もともとのバッハ自身による初演は1735年1月30日で、旺盛な教会カンタータ量産期(いわゆるライブツィヒ第1期、1723-29年)をすでに過ぎ、教会音楽の創作から遠ざかった第2期(1730-35年)の終わりにあたります(バッハ50歳)。直前の年末年始には《クリスマス・オラトリオ》全6部が初演されています(1734年12月25日~35年1月6日、多くが世俗作品のパロディ)。バッハが新たに全楽曲を書き下ろした最後のカンタータであり、冒頭の合唱曲に見られる緻密で高度な作曲技法は、やがて開始される《フー

#### <予告>

#### 第114回定期演奏会

日時=12月3日(土)、午後2時開演

会場=府中の森芸術劇場ウィーンホール

- ・カンタータ《かたえに 主 いませずば》BWV 14
- ・アリアとコラール『アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳』

より10曲 BWV 452, 508-518

- ・カンタータ《われ 足れり》BWV 82
- ・カンタータ《目覚めよと呼ばわる物見の声》BWV 140  
Sop 光野孝子、Ten 鏡 貴之、Bar 山本悠尋  
Orch 東京カンタータ室内管弦楽団、Org 草間美也子  
Cond 大村恵美子  
(チケット発売開始: 9月予定)

#### 荻窪教会クリスマスコンサート

日時=12月17日(土)、午後2時開演

会場=荻窪教会

- ・『アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳』より(2曲)  
《かたえに 主 いませずば》《わが主エホバ われ歌わん》
- ・カンタータ《われ 足れり》BWV 82
- ・《ロ短調ミサ曲》のなかのクリスマス音楽(6曲)  
《グローリア》《地に平和》《み神に謝しまつらん》他  
Ob、Vn、VC、Org と合唱・斉唱

## 日本語版《ロ短調ミサ曲》、2017年秋・再演!!

### ＝参加団員募集＝

6月号月報巻頭「急告」に記されたとおり、来年の創立55周年は、内外の合唱界に衝撃をあたえた「《ロ短調ミサ曲》日本語版」の再演をもって記念することとなりました。

あわせて宗教改革500周年の年、バッハの老舗合唱団としては、敢えてルターの詩によるカンタータを撰ばず、ミサ通常文をテキストとした、バッハ畢生のミサ曲をもって、作曲家自身が極めた“普遍”の魂を歌い上げようとしています。ぜひご参加ください。

○上演時期: 2017年10月/11月頃(杉並公会堂、予定)

○練習開始: 2016年9月3日(土)、5日(月)より。

年末の第114回定期(下段〈予告〉に詳細)の曲目と並行して、音取り練習を始めます。

○問合せ/申込み=東京バッハ合唱団事務局。使用楽譜のことなど、お気軽にお問い合わせください。

ガの技法》の世界に直結するものと言われます。

該当する教会暦(顕現節後第4日曜日)のための作品では、すでに2015年の福島県・南相馬での演目BWV 81《主イエス眠り いかになすべき》を、私たちは演奏しました(舟の上のイエスが嵐を叱る話。マタイ 8:23-27)。81番(1724年1月30日初演)が、カンタータ連作の絶頂期の若々しい創意にあふれたものであったのに対し、14番は「円熟」そのもの。練習を重ねて自在の境地に至らなければ形をなさない音楽です。

### ■カンタータ第82番《われ 足れり》

Ich habe genug BWV 82

ISBN978-4-925234-75-7 C3373 本体 1600 円

バスの独唱カンタータ。団としては2度目の上演です。マリアの潔めの祝日(2月2日、生後40日のイエスの初宮詣での出来事を記念、ルカ 2:22-32)のための作品。初演1727年2月2日。

顕現節(1月6日)を3週過ぎた日曜日(顕現節後第4日曜日、前項のBWV 14を参照)と、この祝日(2月2日)は相前後しています。14番初演の年(1735年)も3日後にこの祝日が巡ってきて、当作品を再演しています(第3稿、アルト独唱用)。

メシア(救い主)に会うまでは絶対に死なないと告げられていたシメオン老人が、神殿の庭でついに幼児イエスに見(まみ)え、《われ足れり/ 待ち望みたる救い主を/ わが腕(かいな)に受けたれば》(第1曲アリア)と賛嘆します。古来「シメオンの頌歌」と名付けられて、世の信仰篤き人びとの感動を呼びつづけてきた箇所です。バッハ自身も、わが身の上を思いつつ、晩年にいたるまで、なんども再演を重ね、少なくとも4つの稿が後世に残されています。「この世のすべてから解き放たれた老人の、天国への郷愁」(シュヴァイツァー)。第2稿はソプラノ、最終稿はバス用に戻りました。